

令和 2 年度教員の養成・採用・研修に関する一体的改革推進事業報告書Ⅱ

「オン・デマンド教材を用いた研修とその効率化に関する調査・研究」

研究代表者 長崎大学言語教育研究センター 廣江 顕

目 次

1. はじめに	3
2. ホームページ概要	4
3. 【論文】小学校における評価の観点が孕む問題点 ーパフォーマンス評価で測る「思考力・判断力・表現力」ー	10

1. はじめに

本報告書は、「令和2年度教員の養成・採用・研修に関する一体的改革推進事業」において、「オン・デマンド教材を用いた研修とその効率化に関する調査・研究」というテーマで採択された受託事業（研究代表者：長崎大学言語教育研究センター廣江顕）の概要であり、2巻から構成されている。

本巻は、（長崎県における）離島・半島地域及び遠隔地の中学校に勤務する英語教師を主な対象として、さまざまなデバイスや機器を併用したスピーキングの指導法及び評価の研修を、オン・デマンド教材を使用しながら受講者自らが勤務時間の管理を行う形式で、移動や出張を伴わないリモート研修の在り方を探る目的で作成された、研究代表者のホームページ（タイトル：「英語へのアプローチ」）の概要を記述したものである。

昨年からのコロナ禍で、義務教育における外国語教育のあり方が、『学習指導要領』の改訂に伴う形で、根本から見直される契機になっていると言える。短期間で収束するようなものであれば、緊急事態宣言が解除された後、「いまできることをやればよい」といった、処方箋的な対処も選択肢の一つであったが、こうまで長く続くと児童・生徒につけたい力を見据えた年間計画を練り直す必要があろう。

その一方で、これまで行われてきた教師への研修講座や各種部会、あるいは他校での研究授業の参観に至るまで、その実施形態が対面式からオンラインあるいは動画への転換を迫られ、Zoom、Webex、Microsoft Teams 等々のアプリを活用した実施が日常の光景となりつつある。しかしながら、学校をはじめとした公的機関（教育庁、市町の教育委員会等も含む）でのPCやデバイス上でのアプリの使用に関しては、セキュリティ上の理由から、さまざまな制限が課されているため、ネット経由で十全に使用することは、場合によっては難しいのが現実である。

また、ここ数年、教育現場にも強く要請されてきた「働き方改革推進」というスローガンのもと、教師の研修もリモートで行い、多忙を極める教師に研修に参加するための移動や出張を可能な限り省こうという努力もなされている。

本受託事業の目的の一つは、以上のような状況を踏まえ、研修開催場所の長崎市からは遠隔地の離島・半島地域にある中学校に勤務する英語教師を主な対象として、教科に関する研修を勤務校で、しかも勤務時間内に行えるよう、オン・デマンド動画教材を作成し、ネット上でアクセスし使用していただける環境を提供することである。

さらに、オン・デマンド動画教材といっても、さまざまなコンテンツ、スキルを扱ったものがあるなか、恐らく最もオンライン、オン・デマンド教材には合わない、一般には考えられているスピーキング・スキル及びその評価を取り上げた。評価については、近年、形成的評価として幅広く取り入れられているパフォーマンス評価を扱った。

本事業が、コロナ禍だけでなく、コロナ後においても、日々、時代に合った資質・能力を習得するべく努力しておられる英語教師に何らかの形で役立てば幸いである。

2. ホームページ概要

本受託事業で製作したホームページは、「英語へのアプローチ」というタイトルで、「ホーム」・「研修教材」・「ブログ」という3つのセクションに分けられている。¹

(1)ホーム

ホームは、一般的な他のサイトと同様、受講（希望）者からのアクセスがあった場合、本サイト全体の構造及びその目的が概観できるようになっている。まず、「本サイトについて」では、本サイトを立ち上げた目的等が述べられている。



¹ 本来なら、「フォーラム」というもう一つのセクションを設け、受講者との意見交換また質疑を行う機能も本 HP に持たせたかったが、長崎大学のセキュリティ上の理由から、今回は見送った。

サブセクションの「Recent News& Topics」では、研究代表者が長崎県教育委員会と連携・協力して行っている事業、小・中学校からの要請を受けサポートを行っている事業、またさまざまな学会に参加することで得られた知見を、タイムリーな形で現場に還元している。

長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

英語へのアプローチ
長崎県における小学校・中学校の英語教師応援サイト

お問い合わせ

ホーム 研修教材 ブログ

Recent news & topics



令和2年9月29日（火）
佐世保市立吉井北小学校

9月29日（火）に佐世保市立吉井北小学校に「外国語」・「外国語活動」のサポートに行きました。児童はとても人懐こく、「昼休みに遊びたい」と誘われ、数十年前ぶりにドッジボールを児童と楽しみました。



令和2年11月24日（火）
佐世保市立吉井北小学校

本日11月24日に、佐世保市立吉井北小学校の「外国語」の授業をサポートに行きました。

(2)研修教材

本サイトにアクセスし研修教材を使用するためには、会員登録をしてログインすることが必要となる。ログイン後、研修用オン・デマンド動画の視聴及び関連教材をダウンロードできるようになる。

国立大学法人
長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

英語へのアプローチ
長崎県における小学校・中学校の英語教師応援サイト

お問い合わせ

ホーム 研修教材 ブログ



中学校英語教師用研修教材①
(評価編：パフォーマンス評価)



中学校英語教師用研修教材②
(評価編：パフォーマンス評価)



中学校英語教師用研修教材③
(評価編：パフォーマンス評価)



中学校英語教師用研修教材④



中学校英語教師用研修教材⑤



中学校英語教師用研修教材⑥

なお、アクセスしただけでは閲覧できない仕様になっている、パフォーマンス評価用の2種類のルーブリックは、以下のものである。パフォーマンス評価の試験官(rater)としてALTも想定していることから、英語版と日本語版の二つを用意した。

総合的ルーブリック（やり取り用）

スコア	パフォーマンス内容
4 (Outstanding)	試験官の質問すべてに応答し、応答も文単位で出来ている。応答は明確で、試験官は明確に理解できる。文法・（語彙を含む）表現は適切に使用出来ている。多少の誤りはあっても意味の理解には影響を及ぼさない程度である。
3 (very good)	応答はできているものの、文単位での応答にはなっていない場合もある。文法・（語彙を含む）表現は、一定程度適切に使用できているが、正確さに欠ける点が多少観察される。
2 (Acceptable)	応答はしているものの、応答できる質問が限られている。試験官への応答の仕方に問題があり、意味が分からない場合がある。生徒が使用する文法・（語彙を含む）表現が限られているため、文単位での応答が出来ない。
1 (Needs improvement)	応答できる場合が極めて限られており、言い淀みが頻繁に観察される。文法・（語彙を含む）表現も極めて限られたものしか使用出来ていない。
0 (Not acceptable)	生徒には、応答しようとする姿勢が見られない。

Analytic Rubric

	Delivery	Language Use	Topic
4 (Outstanding)	Speech is well-paced with very little hesitation or pauses which do not affect the flow. Some minor difficulties with pronunciation and intonation but do not affect the intelligibility.	The student is able to use the appropriate grammatical structures and vocabulary for the task. Some inaccurate use of grammar and vocabulary may occur but do not interfere with the meaning.	The student's response is on topic and well-developed. There is a logical relationship between ideas.
3 (Very good)	Speech is generally clear, with some minor hesitation or pauses. Some difficulties with pronunciation and intonation which requires some effort from the listener.	The student is able to use most of the appropriate grammatical structures and vocabulary for the task. Some inaccurate use of grammar and vocabulary may occur but do not interfere with the meaning.	The student's response is mostly developed and remains on topic most of the time. Relationship between ideas may be unclear at times.
2 (Acceptable)	Speech is generally clear, with some minor hesitation or pauses. Some difficulties with pronunciation and intonation which requires significant effort from the listener.	The student is only able to use limited grammatical structures and vocabulary for the task. Some inaccurate use of grammar and vocabulary interfere with the meaning.	The student's response is somewhat developed and remains on topic some of the time. Connections of ideas may be unclear.
1 (Needs improvement)	The student speaks with long pauses and the conversation is fragmented.	The student is unable to use most of the appropriate grammatical structures and vocabulary for the task. The limited grammar and vocabulary prevent understanding.	The student's response is very limited. The student is unable to complete the task.
0 (Not acceptable)	The student does not respond or does not make an attempt to respond.		

分析的ルーブリック（発表用）

	伝え方 (Delivery)	英語表現 (Language Use)	トピック (Topic)
4 (Outstanding)	言い淀みや区切りがほとんどなく、応答は一定のペースで流れている。僅かに発音とイントネーションに不自然さはあるものの、全体の流れに影響を及ぼさない程度であり理解するのにまったく問題ない。	生徒は、文法及び語彙/表現を適切に用いている。多少の誤りは観察されるものの、言わんとしている意味ははっきり伝わっている。	生徒の応答はテーマに沿っており、文単位でなされている。話す内容に論理的一貫性がある。
3 (very good)	多少の言い淀みや区切りは観察されるが、応答は明確である。ただし、試験官が聞き取りに苦労するような発音やイントネーションが観察される。	生徒は、文法及び語彙・表現をほぼ適切に使用出来ているものの、多少の誤りは観察される。しかし、言わんとする意味は伝わっている。	生徒の応答は、文単位でほぼなされており、テーマに沿った形で留まっている。しかし、話す内容がときどき不明確な場合がある。
2 (Acceptable)	言い淀みや区切りは観察されるが、応答は明確である。ただし、試験官が聞き取りに相当程度苦労するような発音やイントネーションが観察される。	生徒は、ほとんどの場合、限られた範囲の文法及び語彙・表現しか使用出来ていない。文法や語彙の誤りが、意味理解を損ねている。	生徒の応答は、文単位になっているものが少なく、テーマに沿っていない応答も散見される。話す内容の関連が不明確な場合である。
1 (Needs improvement)	言い淀む時間が長く、会話が途切れる。	生徒は、文法及び語彙・表現を適切な形でほとんど使用出来ていない。使用できる文法・語彙が限られているため、それが理解を妨げる結果となっている。	生徒の応答は、表現できるものが限られており、パフォーマンスを遂行できない。
0 (Not acceptable)	生徒は試験官に応答せず、応答しようとする姿勢も観察されない。		

Holistic Rubric

Score	Description
4 (Outstanding)	All the questions are answered and the response is complete. The response is clear and intelligible. Grammar and vocabulary are effective but there may be some minor mistakes that do not affect the meaning.
3 (Very good)	The response is appropriate but may not be fully complete. Grammar and vocabulary are fairly coherent but there may be some inaccurate use.
2 (Acceptable)	The response is addressed but limited. There are problems with the delivery and meaning may be obscured. The range of grammar and vocabulary are limited and prevent full expression.
1 (Needs improvement)	The response is very limited. There are frequent pauses and hesitations. The range of grammar and vocabulary is very limited.
0 (Not acceptable)	The speaker makes no attempt to respond

3. 【児童英語学会投稿論文】

小学校における評価の観点が孕む問題点*
－パフォーマンス評価で測る「思考力・判断力・表現力」－
Some Challenges in the Evaluation for Elementary School

廣江 颯（長崎大学）

1. はじめに

本論の目的は、『学習指導要領』（2017）で文部科学省が育成すべき資質・能力として提示した三つの観点、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「主体的に学習に取り組む態度」のうち、小学校段階での「思考力・判断力・表現力等」を取り上げ、以下のような考察を行うことにある。

- (1) (i) 「思考力・判断力・表現力等」とはどのような力かを、「聞く力」「話す力」における、授業時の言語活動に沿った形で捉える。
- (ii) 「聞く力」「話す力」における「思考力・判断力・表現力等」を涵養する言語活動の試案を、パフォーマンス評価を行うことを想定し提案する。

三つの観点のうち、とりわけ「思考力・判断力・表現力等」が重視されていることが、以下のような資料から窺える。

- (2) a. 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題に課題がある。
 - b. 知識・技能を活用する学習活動については指導や成績評価が難しい。… 十分行われているとはいえない。
- （文部科学省(2016)「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ」）

また、近年のみならず、比較的早い時期から「思考力・判断力・表現力等」の必要性も提唱されていた。

- (3) 基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要である。
- （文部科学省(2011)「教育の情報化ビジョン」）

平成 30 年度と令和元年度（平成 31 年度）の 2 年間の移行期間を経て、令和 2 年度より完全実施となった『学習指導要領』では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主

体的に学習に取り組む態度」の三つが、すべての教科で、かつ小学校、中学校、高等学校と、一貫して育成すべき資質・能力として提示された。その三つを中学校・高等学校のそれぞれの段階でどう涵養・育成していけばよいかという点については、より高度な言語材料を扱うが故に『学習指導要領』でその方向性が明確に示されていることと、中学校、高等学校における新しい『学習指導要領』に沿った授業のあり方や指導等についても、指導主事による伝達講習会を中心とした形で順次アナウンスされていることもあり、小学校を除き、現場の教員には大枠での理解は得られていると予想できる。

その一方で、小学校を加えた小中高という異なる校種間の一貫した連携・学びの接続という点については、どうであろうか。その点に関して、中央教育審議会答申(2016)では以下のように述べられている。

- (4) 外国語教育における「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、… ①各学校の学びを接続させるとともに、②「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から目標の改善・充実を図る。

①について、経過措置期間中では、小学校における「外国語活動」や「外国語」の授業を中学校の英語教員が参観したり、あるいは逆に小学校の教員が中学校の英語の授業を参観する試みが広く見られた。また、各都道府県教育委員会あるいは市町村教育委員会の教育行政管轄区域単位で、中学校の英語教員を加配措置により小学校へ派遣したり、最長で 3 年間の派遣ができる制度を構築したり、といった形での相互交流を行う取り組みも全国的に少なからずあった。その意味で小学校と中学校の連携・協力は、一部の私立学校また公立学校に関する限り、比較的行いやすいと言える。¹

しかし、中学校と高校、あるいは小中高が連携・協力してそれぞれの段階での学びを有機的な形で接続させるという②の段になると、なかなかうまくいかないのが現実である。なぜうまくいかないのかについての考察は本論考の射程外だが、筆者が長崎県の某地区の小中高を、パフォーマンス評価を用いて学びの接続を、当該地区にある高校を中心して試みたものの、評価結果の分析・考察から得られる知見を、「学びの接続」という視点から捉えようとする教員及び教育委員会関係者はそう多くはなかったのが現状であった。

『学習指導要領』に沿って行なわれた教育の成果をどういう方法で測るかという評価については、平成 12 年 12 月に公開された教育課程審議会答申において、以下のような方向性が示唆された。

- (5) 指導と評価とは別物ではなく、評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価するという、指導に生かす評価を充実させることが重要である。
(文部科学省(2000)「教育課程審議会答申」)

さらに、文部科学省(2014)の「今後の英語教育の改善・充実方策についてーグローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言ー」では、指導と評価の一体化を最も明確に反映する評価法のひとつと考えられる、パフォーマンス評価の必要性も示唆された。² 事実、形成的評価としてのパフォーマンス評価をに取り組んだ小学校も、全国的にかなり見られるようになってきた。

にもかかわらず、小学校における教科としての「外国語」では、令和元年の11月には遅くとも各都道府県の教育委員会におりてくると予想されていた新しい評価の詳細が、文部科学省から公開されることはなかった。そこで、いくら遅くとも令和2年の2月には恐らく発表され、その後、現場の教員に大急ぎで伝えられるプロセスを辿るのではないかと、少なくとも教育委員会関係者にはそう予想されていた。³

「カリキュラム・マネジメント」と称して、小学校における「外国語」の週2時間という単位時間数を如何にして確保するか知恵を絞っていた際、全国の事例を調査し妙案を模索していたのと同様に、今回も評価に関する具体的事例を恐らく調査していたのではないかと、と筆者はそう考えていた。というのも、新制度の完全実施が間近に迫った中で、こうした現場への配慮に欠けた拙速な新制度への移行は、できるだけ円滑な移行・対応をと考え準備を行なっている小学校であればあるほど、少なからず混乱を引き起こす可能性があったからである。

2. 思考力・判断力・表現力等とは

「思考力、判断力、表現力等」という表現で括られる力とは、いったいどういう力を文部科学省は想定しているのであろうか。まずは、『学習指導要領』で言及されている箇所を見てみよう。

- (5) 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項 具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを表現することを通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うこと。

イ 身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりすること。

(文部科学省(2017)『学習指導要領』)

(5)から「思考力、判断力、表現力等」そのものが明確に定義されているわけではないことが分かる。あまり具体的に定義しすぎると、授業において、現場の教員が創造的に指導や評価

を行おうとする努力を阻害する可能性がある」と危惧しているからかもしれない。⁴

(5)には二つの範疇があると考えられる。ひとつは、「情報を整理しながら考えなどを形成」ということで、外国語そのものの力ではなく、母国語を介した「思考力・判断力・表現力等」と言い換えられ、もうひとつは、「英語で表現したり、伝え合ったりする」で、これは外国語の能力ということができる。

次に、『学習指導要領』より以前に、文部科学省のサイトに掲載された以下の説明を見よう。

- (6) 問題を発見し、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、プロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていくこと（問題発見・解決）や、情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していくこと（協働的問題解決）のために必要な思考力・判断力・表現力等である。⁵

(文部科学省(2017))

(6)も何のために、またどういう場合に「思考力・判断力・表現力等」が必要かを述べているだけであり、どのような力かには言及していない。また(6)は、(5)で述べたように、母語である日本語を介した能力をほぼ指していると言ったことができる。

以下の文部科学省のサイトには、(5)(6)とは異なり、明確に「知っていること、できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」を、具体的に次のように定義してある（下線は筆者）。

- (7) a. 問題発見・解決に必要な情報を収集・蓄積するとともに、既存の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を獲得し、知識・技能を適切に組み合わせて、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考。
b. 必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために必要な判断や意思決定。
c. 伝える相手や状況に応じた表現。（下線は筆者）

(ibid.)

(7)の下線箇所こそが小学校の「外国語」で求められる、外国語の能力に言及した「思考力・判断力・表現力等」であろう。そこには、育成すべき他の資質・能力及び評価の観点でもある「知識・技能」と関連したあり方が述べられている。

さらにまた、文部科学省(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校外国語・外国語活動）』（以後、『参考資料』と略）にも、次のような記述がある。

(8) 各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する …

(8)も外国語の能力とは異なる、母国語を介した能力を指していると考えられることができる。

以上、文部科学省が想定する「思考力・判断力・表現力等」とは、パフォーマンス評価を想定すれば、⁶ 児童の「聞く力」及び「話す力（やり取り・発表）」という領域では、試験官（担任教員、専科教員あるいは ALT）からの問いかけに、以下のように応答する力ということになりそうである。

(9) 試験官からの問いかけを十分理解し、「外国語」以外の知識・技能も活用し、かつ伝える相手や状況を踏まえ、既習事項を活用し、その場で考えた表現で応答できる力

本論で(9)のように定義するのは、パフォーマンス評価を行う際、児童の「思考力・判断力・表現力等」を見取る際に、「思考力・判断力・表現力等」がどのような場合（場面・状況）で、どういうふうに出るのか、あるいは働くかが重要だと考えているからである。というのも、児童の「思考力・判断力・表現力等」そのものは、観察することはできないからである。

3. 思考力・判断力・表現力の評価規準

本節では、「思考力・判断力・表現力等」に関し、文部科学省がどういった評価を求めているのかを考察し、「聞くこと」と「話すこと（やり取り・発表）」に議論を限定し、パフォーマンス評価を想定しながら、『参考資料』で示された範囲で考察してみることとする。

(10) 「内容のまとまり（五つの領域）ごとの評価基準」を作成する際の観点ごとの留意点

- a. 「聞くこと」は、コミュニケーションを行う場面、状況などに応じて、日常生活に関する身近で簡単な事柄などについて話されるのを聞いて、その概要を捉えている状況を評価する。
- b. 「話すこと[やり取り]」は、コミュニケーションを行う場面、状況などに応じて、日常生活に関する身近で簡単な事柄についての自分の考えや気持ち、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄などについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合っている状況を評価する。

（文部科学省(2020)「参考資料」）

(10a)における「その概要を捉えている状況を評価する」とは、どのような状況が想定されているのだろうか。この点については、やり取りというより、むしろ発表を想定したパフォーマンス評価で見取ることが可能であろう。また、コロナ禍で推奨されていた、聞くことに関する授業時における活動が思い起こされる。⁷そこでは、ペアワークやグループワークといったコミュニケーション活動が躊躇される状況下で、できることをやろうという共通認識のもと、未習得の語彙があっても、どういう場面のどういうストーリーかを児童に推測させながら、短い英文を聞き取らせていた活動では、概要を捉えているかどうかを見取ることができる。

(11) 「思考・判断・表現」の評価（規準）について

- a. 「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身につけているかどうかを評価するものである。
- b. 「【目的等】」に応じて、【事柄・話題】について、簡単な語句や基本的な表現を用いて【内容】を伝え合っている。」が基本的な形となる。
- c. 【目的等】には、当該単元の中心となる言語活動において設定するコミュニケーションの目的や場面、状況を、「〇〇に応じて」「〇〇するよう」「〇〇するために」などの形で当てはめる。その際、学習指導要領の「言語の使用場面の例」や「言語の働きの例」を踏まえて設定する。

(ibid.)

(11)では、前節で述べたように、評価においても、「各教科等の知識及び技能」を活用しているかという、外国語以外の能力を見取ることと、「簡単な語句や基本的な表現を用いて【内容】を伝え合っている」という、外国語の能力を見取ことに分かれているといえる。

4. 実践例

本節では、パフォーマンス評価に取り組み、相応の知見が得られたと考えられるこれまでの研究及び実践報告から、泉・ほか(2018)の一部と相模原市教育委員会(2018)を取り上げ、「思考力・判断力・表現力等」をどういう規準でどのように測定されたのかを考察したい。

4.1 泉・ほか(2018)

泉・ほか(2018)では、「思考力・判断力・表現力等」を以下のように規定している。

- (12) コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、外国語を聞いたり読んだりして情報 や考えなどを的確に理解したり、外国語を話したり書いたりして適切に表

現したりするとともに、情報や考えなどの概要・詳細・意図を伝え合うコミュニケーションがきているかどうか

研究協力校の6年生を対象に『We Can! 2』のUnit 2 “Welcome to Japan”を題材に、具体的に単元目標として(13)のように設定している。

- (13) a. 日本文化に関する話を聞いたり、簡単な表現で書かれた文を読んだりしてその概要を理解することができる。
- b. 外国人に紹介したい日本文化について、学習した表現を使いながら話したり、例を参考に簡単な語句や表現を使って書いたりする。

さらに、評価ルーブリックを二つの評価項目に分けて、以下のように策定している（一部改変）。

(14) a. 考えの整理

A（十分満足できる）：

日本文化についての説明や感想を伝える形容詞を選ぶとともに、単語や文をつけ足して相手の理解を深める発表ができた。

B（概ね満足できる）：

伝えたいものを選んで調べ、日本文化についての説明や感想を伝える形容詞を選んで発表することができた。

C（支援を要する）：

お手本を使った発表しかできなかった。

b. 文のまとめ

A（十分満足できる）：

話の区切れごとに相手が理解しているかを確認するような表現が加えられていた。

B（概ね満足できる）：

叙述と自分の考えとの違いが分かるように区切って発表できた。

C（支援を要する）：

話の区切れが分かる発表ではなかった。

泉・ほか(2018)を取り上げたのは、「外国語を話したり ... して適切に表現したり」、「情報や考えなどの概要・詳細・意図を伝え合うコミュニケーションがきているかどうか」といった箇所から分かるように、「思考力・判断力・表現力等」がどこに表出するのかを明示している。続けて、表出の仕方が「日本文化についての説明や感想を伝える」外国語の「形容

詞を選ぶ」ことと、「単語や文をつけ足して」という、既存の知識（つまり、既習事項）を活用できたかという規準を設けて測定した、という二点において評価できる。

4.2 相模原市における試み

相模原市教育委員会は、教育委員会単位としては、全国に先駆けて市内全 72 小学校の 5・6 年生を対象に令和元年 9 月よりパフォーマンス評価を導入することを決定した。「聞く力」と「話す力」を、相模原市教育委員会として統一した指導及び評価規準で育成していこうという趣旨のもと、徹底を図るために『小学校外国語パフォーマンス評価実践ハンドブック』が作成されている。⁸ そこでは、「思考力・判断力・表現力等」の評価が以下のような規準で実施されている。⁹

(15)適切な発話

自分の好きなもの・関連質問への応答がどの程度できているか。

(相模原市教育委員会(2019))

「適切な発話」とは、目的・場面・状況を踏まえられているかがポイントとなっており、対象は 5・6 年生で、題材はパフォーマンス評価を行う時点での『We Can! 1』、『We Can! 1』を含む『We Can! 2』の、それぞれの既習内容であった。さらに、具体的評価規準は以下のように定められている。

(16)

評価	A	B	C
規準	目的・場面・状況を踏まえて、自分の好きなことについて詳しく応答している。	既習表現を用いて、ALT の先生に自分の好きなことなどを伝えたり、質問に答えたりすることができている。	自分の好きなことについて伝えたり、質問に答えたりすることができていない。

A 評価と B 評価の規準の違いが「目的・場面・状況を踏まえて」いるかどうかと思われるが、パフォーマンス評価の実施場面を想定すれば、応答する児童の発話で具体的にどのような違いが観察されるのかが疑問ではあるが、一方で、B 評価にある「既習表現を用いて」いるかどうかを見取る点は、評価に値する。

5. 「思考力・判断力・表現力等」が孕む問題点

前節まで「思考力・判断力・表現力等」とはどのような力か、どのような場面・状況でどのように表出するのか、またどのような点を見取りどう評価を行うか、という三点を文部科

学省の資料と二つの先行研究・実践報告をもとに考察し、パフォーマンス評価を想定しながら見てきた。本節では、そうした授業時の言語活動からパフォーマンス評価に至るプロセスで生じる問題点を議論したい。

まず、第一に、「思考力・判断力・表現力等」を含めた評価を行う機会・場面が増加するのではないかという、現場の教員が抱えている不安に関する問題である。文部科学省が作成したこれまでの指導案例等を見ても、評価を行う場面が多過ぎるという声が上がっている。そもそも小学校では、中学校におけるペーパーテストという形を中心とした総括的評価とは異なり、指導の途中段階を評価する形成的評価を行う場面が「外国語」のみならず多い。これに対して、文部科学省は、(5)ですでに言及したように、「指導と評価の一体化」を推し進めていくと、評価から指導を見直すことで形成的評価を行う、児童の外国語の力を見取る機会・場面をスリム化できると考えているようである。¹⁰

しかしながら、見取らなければいけない力は 4 技能 5 領域となり、それを教科書に沿ってどのように計画を立て、どのように評価していくかを小学校教員は考えておかなければならない。形成的評価と言っても、児童が指導を受けながら伸びていく時間軸も踏まえなければならず、パフォーマンス評価のようなものは、そうそう学期中に行えるものではない。例えば、この点に関し、文部科学省の直山木綿子氏は、「同じ言語活動で 2 つの観点を見取することは可能」との発言を行ったようだが、¹¹ 専科教員でもない、担任教員が同時に 2 つの観点を見取することは現実的にはかなりの困難を伴うことが予想される。

第二に、第 2 節で「思考力・判断力・表現力等」が、外国語そのものの能力と外国語以外の、他教科の知識・技能とその活用に分かれていたのを見てきた。すぐに思いつく疑問は、「外国語」以外の教科の知識・技能及びその力を活用するといっても、そうした評価をすべての小学校の教員が平等に行うのが可能かということである。というのも、外国語以外の教科で何を学び、個々の児童の得手・不得手は担任教員ならば熟知しているかもしれない。しかしながら、専科教員が 2 年前から（令和 3 年度の専科教員のための予算要求は現時点で認められているかどうかは定かではないが）1,000 人単位で増加しており、例えば長崎県のような地方では、数校まわっている専科教員も少なくなく、その上、文部科学省が教科担任制という制度を構築する目処も立ってきたようである。¹² そうした担任以外の教員が、どのようにして児童個々が持つ他教科の力を把握することができるのか甚だ疑問である。

また一方で、外国語以外の教科の知識・技能及びそれを活用する力をなぜ「外国語」が担わなければいけないのかという根本的疑問も生じる。小学校段階では、他教科の力を最も総合的に使う機会が多いのはいわゆる「発表」という領域であろう。そのことは、すでに(5)から(7)で見てきた通りである。例えば、『学習指導要領』にも示唆されているように、国語教育との連携という方向性も打ち出されている。¹³

第三に、「思考力・判断力・表現力等」がどういう場面・状況で、どのように表出し働くかが日々の授業時における見取りでは大切だということを上で強調してきたが、その力をどういう仕方で育成していくかという点についても同様に重要視されているのかというと、

必ずしもそうとは言い難い状況であろう。「外国語」をこれまで参観させていただいた限りでは、そのような点に着目した言語活動を観察したことがない。参観した小学校のほぼすべてにおいて、(17)に例示されているように、一定の枠に児童の「思考力・判断力・表現力等」をはめ込む指導が行われていた。

(17) Student A: “Hello, everyone! My name is _____. This summer I went to _____. I ate _____. It was _____.”

(17)は、児童が一人ずつ教卓の前に立ち、発表という形を取ったものだった。これで児童の「思考力・判断力・表現力等」が育成できるだろうか。こうした指導を行っている教員によれば、クラスにはさまざまな子どもがおり、一定の枠を与えなければ発表が成り立たない、ということだった。そうした児童を B 評価まで引き上げるのが教員の責務であろう。

そうした児童がクラスに少なからずいるのは事実だが、正しい「思考力・判断力・表現力等」を育成していくのもまた教員の責務であろう。

最後に、東京書籍(2020)の *New Horizon Elementary English Course 6*, Unit 1～Unit 5 を使用して、「思考力・判断力・表現力等」を育成する言語活動を提案する。使用する教科書は、当該ユニットまで児童が学び終えたという前提で行うものである。

(18)Activity: *Find someone who (wants to)*

言語材料 : What language do you want to study?/ Where are you from?/ What is your favorite animal?/ What animals do you like?/ Do you have brothers or sisters?/ What time do you usually go to bed?/ What do you usually do on Saturdays?/ Where do you want to go?/ Why do you like Italy?/ What do you want to eat?/ Do you like traveling?/ Where did you go this summer?/ Did you enjoy camping?/ What did you eat?/ What did you do last Saturday?/What can penguins do well?/ Where do lions live?/ What do penguins eat? (語彙は省略)

準備物 : 教師は以下のようなワークシートを作成し、当該活動を始める前に、児童がすでに習っている動詞を選んでおく。児童は自分の名前を表に記入する。

Name	What _____ do you want to study?	What _____ do you want to watch?	What _____ do you want to play?

指導手順

- [1] 児童は教師とワークシートを確認し、選んだ動詞と対応する、自分がすでに習った名詞のリストを教師とクラス全員で作成する（例えば、to study → language, subject, book, person; to watch → movie, TV show 等）。
- [2] 児童はワークシートの下線欄に、クラスで作成したリストから選び埋める。
- [3] 教師は児童を指名し、サンプルケースを行い、下線欄を埋めてみる。
- [4] 児童はクラスメートにワークシートの質問を行いながら、ワークシートを埋めていく。
- [5] 一番早く埋めてしまった児童にボーナスポイントを与える。
- [6] ある程度終了した段階で、教師は児童を指名し、“Who did you talk to?”それに“What did X say?”という発問を行う。

(19) Activity 2: *Guess the student*

言語材料：Where are you from?/ What is your favorite animal?/ Do you have brothers or sisters?/ What do you usually do on Saturdays?/ I'm from (place)./ My favorite animal is (animal)./ I have (a brother/a sister/two brothers)./ On Saturday, I usually (verb) (noun). (語彙は省略)

準備物：児童がメモを取るインタビュー・シートを用意する。シートには、クラスに応じて、使用する質問を4つ用意し、回答欄も設けておく。本活動では、児童は4人程度からなるグループを作り、お互いにインタビューを行う。次に、インタビューを行うことで知り得たクラスメートの情報をクラス全員に発表する。その一方で、発表を聞いている児童は、誰のことを行っているのか推測する。

指導手順

- [1] 教師はクラスメートとインタビューをし合い、「推測ゲーム」を行うことをアナウンスする。
- [2] 教師は、サンプルとして、用意した質問をクラス全員に行い、答え方をあらかじめ確認しておく。その後、回答を板書し、用意しているメモ用紙に記入させる。
- [3] 児童を4人程度のグループに分け、お互いにインタビューさせる。
- [4] 一定時間が経過した後、教師はインタビュー・シートを回収し、“Who am I?”と言うことで“Guess who”ゲームが始まったことを児童に理解させる。次に、教師はインタビュー・シートを読み上げ、再度“Who am I?”と問いかけ、それがどのクラスメートのものか推測させる。これを数回行う。
- [5] グループを入れ替え、児童だけで[4]を行う。

以上、提案した言語活動を研究協力校で行ったが、コロナ禍でもあり、十分なデータが入手できているとは言い難い。ただ、予備的な考察ではあるものの、(18)(19)の言語活動を行ったところ、担任教員は活動を説明するのに日本語を通常の授業よりはるかに使用しなけれ

ばならなかった一方で、語彙や表現は既習事項でもあったので、復習は短時間で済ませられ、児童の英語によるアウトプットが飛躍的に伸びた。ただ、教員が活動自体の説明を詳しくしなければいけないため、ALT には使いづらいかもしれないという知見を得た。

(18)(19)で提案した言語活動の試案を使った結果、「思考力・判断力・表現力等」がどのように育成できたかを十分精査した形で提示するべきだが、そのことに関する本格的な論考は今後の課題としたい。

6. 結論

本論考では、『学習指導要領』で育成すべき三つの資質・能力のうち「思考力・判断力・表現力等」に焦点を当て、パフォーマンス評価を行うことを想定して、「聞く力」・「話す力」に限定して「思考力・判断力・表現力等」がどのような力かを明らかにし、現状に警鐘を鳴らしながら、どのようにして育成すべきかの試案を提案した。また、「思考力・判断力・表現力等」に関する評価方法に問題があることも指摘した。

「思考力・判断力・表現力等」を見取る一つの形成的評価として、パフォーマンス評価が望ましいことは、廣江(2018)、廣江・小笠原(2019)でも触れてきたが、見取る領域が「やり取り」なのか「発表」なのかで、育成する際の言語活動も別途考える必要がこれからありそうである。

註

*本論考は、第 20 回小学校英語教育学会中部・岐阜大会で行った研究発表（オンライン）に修正・加筆したものである。発表の際に、司会の方を含めて、いくつかの有益な質問・コメントをいただいた。感謝申し上げたい。

1. 小学校と中学校の学びの接続という観点からの実施状況の詳細については、文部科学省(2020)「全国指導主事会における行政説明資料」を参照。
2. 2019 年 11 月 25 日に行われた全国指導主事連絡協議会で配布された資料のタイトルが「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料（小学校・中学校）」となっており、この点からもこれまで行われてきた指導のあり方を評価の観点から見直すという文部科学省の姿勢が垣間見える。
3. 令和 2 年 11 月 25 日に行われた全国指導主事連絡協議会、また同年 11 月 26 日に開催された課題講演「小学校外国語教育 評価から見直す指導の在り方」において、文部科学省初等中等教育局視学官兼国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程審議官である直山木綿子氏が配布した資料に拠っている。その際、評価の骨子に部分的な形ながら言及があり、評価資料の詳細は、令和 2 年の 3 月頃、国立教育政策研究所から発表されるとのアナウンスがあったようである。
4. 同様の指摘が、中井(2016)でもなされている。

5. 本資料は、以下のサイトから引用。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm
6. 本論で想定しているパフォーマンス評価は、廣江(2018)、廣江・小笠原(2019)を参照。
7. 令和2年度長崎県第一回英語教育推進協議会における長崎大学中村典生氏による講和
8. 本資料を活用することをご快諾していただいた相模原市教育委員会学校教育課には感謝申し上げます。
9. 「自分の好きなもの・関連質問への応答」を除いた箇所は、筆者が付け加えた。
10. 令和元年11月25日に行われた全国指導主事連絡協議会での直山木綿子氏の説明による。
11. 令和元年11月26日に行われた「教育セミナー九州2019 in 長崎」での文部科学省初等中等教育局視学官兼国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程審議官文部科学省直山木綿子氏の課題講演「小学校外国語教育 評価から見直す指導の在り方」での発言。
12. 文部科学省中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して(答申)～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」
13. この点につき、『学習指導要領』の小学校国語に、「言語能力の向上を図る観点から、外国語活動及び外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること」という記述がある。これ以外にも大津・ほか(2019)を参照。

引用文献

- 泉恵美子・山川拓・黒川愛子・津田優子(2018)「思考力・表現力を育成するパフォーマンス課題と評価—小中の英語教育における取組—」,『京都教育大学教育実践研究紀要』,第18号, 213-222.
- 大津由紀雄・浦谷淳子・齋藤菊枝編(2019)「日本語からはじめる小学校英語 —ことばの力を育むためのマニュアル—」, 開拓社
- 相模原市教育委員会(2018)『小学校外国語パフォーマンス実践ハンドブック』
- 中井弘一(2012)「英語授業における思考力・判断力・表現力育成の方途」,
『大阪女学院大学教職課程機関誌 : OJC 教職活動報告・研究』, 156-166.
- 廣江顕(2018)「パフォーマンス評価とその意義」
『長崎大学大学教育イノベーションセンター紀要』第9号, 33-45.
- 廣江顕・小笠原真司(2019)「小学校におけるパフォーマンス評価の可能性」
『日本児童英語教育学会研究紀要』第38号, 129-144.
- 文部科学省(2000)「教育審議会答申」
- 文部科学省(2011)「教育の情報化ビジョン～21世紀にふさわしい学びと学校の創造をめざして」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/_icsFiles/afieldfile/2011/04/28/1305

484_01_1.pdf)

文部科学省(2016)「中央教育審議会答申」

文部科学省(2017)『学習指導要領』

文部科学省(2019)「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料
(小学校、中学校)」, 全国指導主事連絡協議会配布資料

文部科学省国立教育政策研究所(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 (小学校外国語・外国語活動)』

文部科学省(2020)「全国指導主事会における行政説明資料」, 14-15.

文部科学省(2021) 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(答申) ～
全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」